低炭素社会 取り組み学ぶ

技術懇話会 木材活用など紹介

環境保全による低炭素社会の実現をテーマにした「第2回技術懇話会」（日本技術士会九州支部県支部など主催）が5日、佐賀市で開かれた。県内での木材活用や企業の取り組みなどに関しての講演があり、懇話会メンバーや建設関係の技術者ら35人が聴講した。

建設コンサルタント「九州構造設計」（佐賀市）の相談役で木材利用研究会（佐賀）会長の宮副一之さんは、軟弱地盤に適した伝統工法「木杭」を利用した佐賀平野のクリークでの二酸化炭素（CO_2）削減効果などを紹介した。木杭は古くから佐賀平野では基礎として使われていたが、昭和10年代に軍需物資、戦後復興での木材需要に伴い、森林の大量伐採、拡大造林が進められた。しかし、政府の閣議決定で木材代替資源の使用普及促進が挙げられ、コンクリート杭などが主流になっている。

宮副さんは「拡大造林政策で生み出された多くの人工林が伐採されないまま、収穫時期を迎えている」と指摘し、「高齢化してCO_2を吸収しにくくなった木を伐採し木杭などで有効活用することで、地中に埋設できる。サイクルを円滑に回すために国産材を積極的に利用し、需要を高める必要がある」と主張した。

県内の伝統産業や食品の異業種11社でつくる「SAGA COLLECTIVE（サガ コレクティブ）協同組合」の山口真知事務局長は、2023年度は21年度と比較し、CO_2を302トン、18・7％削減していることや、各社の取り組みを報告した。「カーボンオフセットを免罪符とせず、地元の自然がよくなることを考えて活動したい」と強調した。（福本真理）

低炭素社会の実現に向けた県内の取り組みなどが紹介された技術懇話会＝佐賀市